

全職員対象の一次救命処置(BLS)コースが定期開催1周年を越えました！

全職員対象BLS講習会実行委員会 遠藤 穰治

一次救命処置は目撃のある心停止状態に対して最も有効とされる、胸骨圧迫(いわゆる心臓マッサージ)を中心とした一連の手技で、必要に応じてAED(automated external defibrillator;自動体外式除細動器)も用います。現場に居合わせた人(bystander)が早く蘇生行為を始めるほど救命率が高くなるのが日本を初めとした各国のデータから証明され、2010年改定の国際ガイドラインに基づいた各国の蘇生ガイドラインも一般市民に広く実行できるよう手法が簡略化されました。

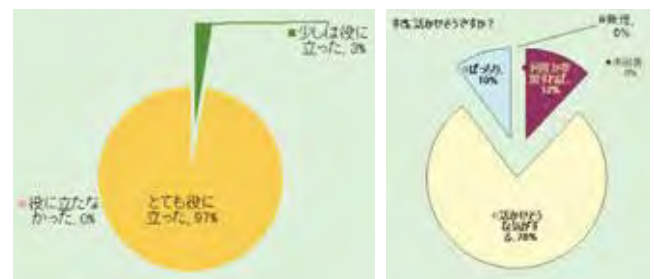
そこで、職種を問わず病院で勤務する者にBLS習得は必須と考え、職員全体の救命処置への知識と技能を向上させる目的で、平成24年10月より全職員対象の最新版BLSコースを月2回のペースで定期開催しはじめた事はフェニックス28号(平成25年4月)でご紹介したとおりです。

それと並行して、平成25年6月以降は院内急変に対する初期対応が全館統一されたこともあり、ますます院内BLS普及の需要が強くなってきております。



全職員が対象ですので、医師・看護師のみならず技術員・技師・薬剤師といった多業種で小グループ制の短時間集中型コースを行い、事務職員にも一般市民向けの講習を行っております。

12月の時点で1年2ヶ月が終了し、2巡目に入り、現時点で総勢329名(医療関係者 296名、事務職 33名)が受講修了しました。修了者にバッジが配布されていますので、院内で着用している職員を見かけられた方もいらっしゃるかもしれません。アンケート結果によれば、内容に関する満足度も高く実践的な内容のため何度か練習したいという意見も見られました。



修了者へのバッジは、今まで用いていたタイプの在庫がきれることと、開催1周年越えを記念して昨年10月に総務課を通して医学部および附属病院の教職員並びに学生を対象としてバッジの新デザインを公募しました。

応募デザインはどれも素晴らしいもので、それらを統合した形のものを最終デザインとして決定しました。

実は旧バッジは他のイベントで作成されたものの流用であったため、今回のものが当イベントとしては初回オリジナルバージョンになります。



旧バッジ



新バッジ

バッジは製造でき次第、講習会修了者に順次配布してゆきますので、今後は新しいバッジを付けた仲間が続々増えてゆく予定です。

患者さん及び御家族がより安心して医療サービスを受けられますよう、本コース内容が一人でも多くの人の救命と笑顔に繋がることを祈りつつ、これからも引き続き講習会の定期開催を継続してゆきます。

平成25年度 女性医師・看護師のための復職支援プロジェクトを開催！

医学教育改革推進センター/卒後臨床研修センター 小松 弘幸

女性医療従事者数は年々増加傾向にあります。その一方で、出産・育児のために一旦離職した女性医師や看護師の医療現場復帰はなかなか進んでいないのが現状です。女性医師を対象とした群馬県の調査では、復職に際して7割以上が不安を感じており、特に「医療手技」、「薬剤」、「医療理論の変化」に対して不安が強いとの結果が出ています¹⁾。

最近、医療技能教育や安全教育の新しい手法として、様々な医療シミュレータ(患者さんの体の一部や病気を再現した高性能のマネキンやIT機器)を活用した医療シミュレーション教育の積極的な活用が注目されています。宮崎大学医学部では医療シミュレーション教育の充実を目指して2009年度より「臨床技術トレーニングセンター」を開設し、現在は医学生や医師、看護師など年間約4,000名の利用があります。また、医学教育改革推進センターや卒後臨床研修センターでは、医学生や研修医への医療シミュレーション教育実践報告²⁾⁻⁴⁾も積極的に行っています。

本院では、これらの教育実践を女性医師や看護師の復職支援にも役立てようと、2011年より毎年1回「復職支援プロ

ジェクト」を行っており、今年度は11月28日に第3回目を開催しました。内容は、平日午後の3時間に11種類の実習(静脈採血・静脈路確保、動脈採血、導尿、心音・肺音聴診、一次救命処置、心電図モニター判読、気管挿管、中心静脈穿刺、腹部エコー、上部消化管内視鏡、輸液ポンプ・シリンジポンプ操作)の中から希望する項目を3~5つ選択して実習できるようにし、8名の現役医師・看護師がインストラクターとして1項目につき30分ずつ指導にあたりました(写真1, 2)。また臨時託児室も併設し、お子さんを預けて実習に取り組まれる方もおられました。

今年度は10名(女性医師1名、看護師9名)の参加があり、実習後のアンケートでは静脈採血・静脈路確保、導尿、輸液・シリンジポンプ操作法、バイタルサイン評価が特に役立ち、参加者全員が今後の自身の復職あるいは技能向上に非常に役立つとのご回答をいただきました。来年以降も、定期的に開催していきたいと思っておりますので、ご興味のある方はぜひご参加下さい。心よりお待ちしております。

参考文献

- 1) 井手野由季, 菊池麻美, ほか:復職支援に求められることー「医師の生涯教育・復職支援に関するアンケート調査」より, 医学教育 44: 237-242, 2013.
- 2) 小松弘幸, 有村保次, ほか:卒前臨床実習における心臓病患者シミュレータを用いた診察実習, 医学教育 42: 55-63, 2011.
- 3) 有村保次, 小松弘幸, ほか:肺音聴診シミュレータを用いた肺音聴診実習の教育効果, 日呼吸会誌 49: 413-18, 2011.
- 4) 小松弘幸, 有村保次, ほか:新研修医オリエンテーションにおける医療シミュレータを用いた基本的臨床手技実習の有用性, 宮崎医会誌 37: 195-200, 2013.



写真1. 心音・肺音聴診実習の様子



写真2. 静脈採血・静脈路確保実習の様子

第3回女性医師・看護師のための復職支援プロジェクト 実習終了後アンケートより一部抜粋

参加者10名中9名からの回答（医師1名・看護師8名、20代 1名/30代 3名/40代 3名/50代 2名）

今後もこのようなプロジェクトがあれば、ご自身は参加したいですか？（1つ選択）

- ぜひ参加したい（7名）
- 機会があれば参加したい（2名）
- 参加したくない
- 分からない

今後もこのようなプロジェクトがあれば、ご友人や知人に勧めたいですか？（1つ選択）

- ぜひ勧めたい（9名）
- 機会があれば勧めたい
- 勧めたくない
- 分からない

今回のプロジェクトは全体として満足の内く内容でしたか？（1つ選択）

- 非常に満足（8名）
- やや満足（1名）
- やや不満
- 非常に不満
- どちらともいえない

今回の実習は、今後の復職あるいはご自身の技能向上に役立つと思えますか？（1つ選択）

- 非常に役立つ（9名）
- ある程度役立つ
- あまり役立たない
- 役立たない
- 分からない

今日の実習で最も役に立った内容は、以下のどれでしたか？（上位3つを選択）

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 静脈採血/静脈路確保（6名） | <input type="checkbox"/> 一次救急処置（1名） |
| <input type="checkbox"/> 動脈採血 | <input type="checkbox"/> 気管挿管 |
| <input type="checkbox"/> 導尿（4名） | <input type="checkbox"/> 腹部エコー（1名） |
| <input type="checkbox"/> 心音・肺音聴診（2名） | <input type="checkbox"/> 上部消化管内視鏡（1名） |
| <input type="checkbox"/> バイタルサイン（3名） | <input type="checkbox"/> 輸液ポンプ/シリンジポンプ操作（3名） |
| <input type="checkbox"/> 心電図モニター判読（2名） | <input type="checkbox"/> 該当なし |

その他ご意見があれば、記載をお願いいたします。

- 無料託児所がありとても助かりました。託児がなければ参加できませんでした。また、機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。
- 本当に親切に教えて頂きありがとうございました。特にいただいた資料はありがたいです!!
- 有意義な時間を過ごせました、ありがとうございました。次回も同様のプロジェクトがあればぜひ参加させていただきます。今回4つの実習を受けさせていただきましたが、今回受けていない実習も受けてみたいものがありましたので、ぜひ 次回も開催していただければと思っています。
- 復職するのに、不安が多々あります。こうした企画で復帰する事を前向きに考えました。ありがとうございました。
- とても勉強になりました。配布資料も活用したいと思います。どうもありがとうございました。
- 懇切丁寧に教えて下さりよく分かったと思ひ助かります。

医局長 盛武 浩 医員 木下 真理子

小児科は、小児の内科疾患を扱う診療科です。宮崎大学医学部附属病院では、感染・免疫グループ、循環器グループ、血液・腫瘍グループ、腎臓グループ、内分泌・代謝グループ、神経・発達グループの6つの分野に分かれており、各々が専門領域において質の高い医療を提供できるよう、日々努力しています。

今回は、血液・腫瘍グループの取り組みを、小児がんにスポットを当ててご紹介します。血液・腫瘍グループは、主に血液疾患、小児がんの診療に携っております。小児がんに関して言えば県内唯一の治療施設であり、宮崎における小児がんの拠点病院として、地域と連携を図りながら診療に当たっております。病院の再整備に当たり、2012年7月より新たに小児科病棟にクリーンルームが新設されました。病室は全7床で、2床は造血幹細胞移植等の高度医療が可能な病室です。化学療法や幹細胞移植に伴う骨髄抑制状態にある子供達は、しばしば重篤な感染症を引き起こすことがあります。このような易感染状態にある子供達に、より安全に治療を行うことが可能となり、真菌感染がかなり減少致しました。また、好中球減少時もクリーンルーム内であれば病室外に出られるため(移植時は例外ですが)、治療中の子供同士での交流が可能となり、ストレス緩和にも寄与していると思われま

す。ここからは小児がんの現状についてお話ししたいと思います。日本における小児がんの発生頻度は、15歳未満の小児人口1~1.3万人に1人と、決して高くはありません。しかし1~14歳以下の小児死亡原因では事故死に次ぐ第2位であり、依然として小児の生命を脅かす重要な疾患です。成人がんの治療は手術が主体となりますが、小児がんは小児白血病や肉腫、胎児性がんがほとんどであり、手術だけでなく、化学療法や放射線療法が極めて有効です。早期発見が重要なのは成人同様ですが、遠隔転移があっても、3~4割の患者で治癒が期待できます。そのためには化学療法だけでなく、手術や放射線療法を最適に組み合わせた集学的治療が不可欠です。個々の患者さんに最適な治療を提供できるよう、他の診療科と密に連携を図りながらの診療を心がけております。

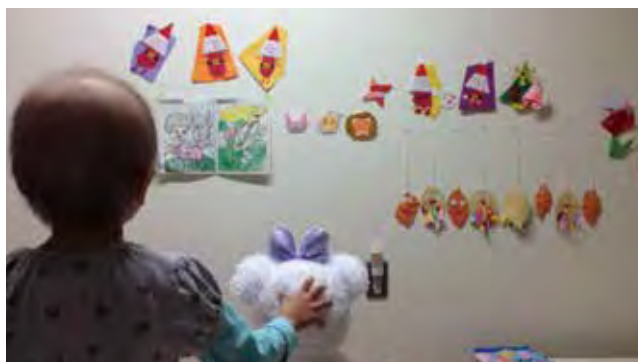
新規抗がん剤の開発や、それを組み入れた臨床研究、幹細胞移植を含めた強化療法や支持療法の進歩により、小児がん全体の治癒率は70~80%まで向上しました。一方で小児がんの2~3割の子供達は、現在も治療の甲斐なく命を落とし

ています。何故治せない子供がいるのか？これらの子供たちを救うためにはどうすれば良いのか？この疑問に答えるには、その発生要因の解明と、治療法への還元が今後鍵となると思われま

す。近年になり、がんの発生要因には遺伝子異常が深く関わっていることが分かってきました。また成人がんが生活習慣や加齢が密接に関わっているのに対し、小児においては胎生期にすでに遺伝的変化がおきていると考えられております。宮崎大学医学部附属病院小児科でも、研究の一環として、家族性に発症した白血病家系の遺伝子解析を行っており、発がん過程の解明に寄与することを期待しています。最後になりますが、飛躍的な小児がん治療の進歩により、多くの子供達の長期生存が可能となりました。一方で、原疾患や治療による晩期合併症が問題視されるようになり、身体的問題だけでなく、心理的、社会的問題も、小児がん経験者のQOL(生活の質)を下げていることがわかりました。治療成績を担保し、なおかつ晩期合併症を減らす治療法が模索されており、その効果は徐々に現実化してきております。一方で、発症者が少ない事もあり、小児がんの社会的認知度は低く、社会的保障や支援も発達途上にあると言えます。病気の根治だけでなく、子供達が社会復帰し、健全に成長できるようにするためには、医療だけでなく周囲の病気への理解や、社会的側面からの支援も今後重要と思



クリーンルーム (全7床)



クリーンルーム内 (全室個室)



夏祭りの様子

小児科病棟の紹介

看護師長 川崎 朋子

小児科病棟は35床を有し、4階の東病棟にあります。様々な疾患を対象としており、手術を必要とする子どもや事故などで緊急搬送される子どもたちなどあらゆる健康レベルの子どもたちが入院しています。

小児病棟の患者さんは、乳幼児から思春期までの子どもたちであり、成長、発達過程の途中であるため、疾患にともなう問題以外にも学業や友人関係、受験、就職などの様々な問題が生じる場合があります。このことに対し、医師、看護師、保育士、臨床心理士、メディカルソーシャルワーカー、養護学校の教員、理学療法士などの職種が一丸となり連携をとりながら、病気の子どものとその家族が抱える問題に関わっています。

今回は、看護師が子どもたちと取り組んでいる自己健康管理表や多職種と取り組んでいるイベントなどについてご紹介します。

まずは、自己健康管理表について紹介します。

小児病棟には、一生涯、病気と向き合って生活していかなければいけない子どもが沢山います。そこで、私達看護師は、年齢に合わせ自らが健康問題に向き合い、病気や治療を理解しながら日常生活が送れるように、健康チェック表を用いて健康管理を促しています。毎日、子ども達は自分の尿や便の状態、血圧値などを記入し自らの健康管理に取り組んでいます。

この表を活用したことで、体重管理や内服管理、体調管理など、子ども自身で健康を意識して治療に参加することができるようになってきました。

また、小児病棟では、季節毎に行事を行なっています。行事は、子どもたちとご家族、医療者のふれあいの場となり、絆を深める場となります。患者さんやご家族は、出し物をする普段見ることのない医師・看護師などの姿を見ることで親近感を持って頂けるようで、治療を行う上での信頼関係へと繋がっています。また、行事に向かい、子どもたちは、お神輿作りやハロウィンの仮装作りをします。1つのことをやり遂げた子どもたちは、達成感と充実感を味わいます。この子どもの頑張る力を引き出すことは、小児医療ではとても大切なことで、治療と向き合う力となります。春には遠足に行きます。毎年栄養士さんが子どもたちのリクエストにそってお弁当を作ってくれます。遠足のイベントの一つに、救命救急センター医師や操縦士によるドクターヘリ体験があります。今年で2年目を迎え恒例行事となりそうです。入学式、卒業式は、支援学校の先生方と共にお祝いします。夏祭り、ハロウィンパーティ、クリスマス会などは、医師、看護師、保育士、支援学校の先生、宮崎大学医学部医学生や看護学生など皆でお祝いをします。



ドクターヘリ体験



遠足のお弁当



クリスマス会



お正月

これからも、小児病棟看護師は、多職種と連携し病気と向き合って頑張っている子どもたちとご家族が安心して治療・療養生活を送れるようにより良い看護を目指して頑張っていきたいと思います。

地域医療連携センターの紹介

地域医療連携センター長 帖佐 悦男

地域医療連携センターは、平成12年10月、地域医療機関との連携強化を目的として地域医療連携推進センターとして設置され、平成21年7月、地域医療連携センター(以下、センターとする)へ名称変更されました。また、平成24年11月、当センターに新たな前方支援としてベッドコントロール担当の看護師長の配置、更に平成25年7月、副センター長として医師・准教授(兼任)が配置されました。センターの構成は、センター長を含め4名でしたが、現在はセンター長、副センター長3名、看護師長1名、看護師1名、ソーシャルワーカー5名、事務職員3名へと増員されセンターの役割と機能強化を進めています。

役割と機能

1. 特定機能病院として高度な医療の提供および高度な医療の研修を実施できるよう地域医療連携センターとして協力する
2. 医療機関や保健・福祉施設等との協力と連携を深め、地域に貢献する
3. 安全に安心した医療を受けることができるよう前方支援を行う
4. 安全に安心した医療を地域で提供できるよう後方支援を行う

平成24年4月には、救命救急センターの稼働、ドクターヘリの運航開始に伴い、更に宮崎県内の医療機関との連携が必要となり、平成25年1月より宮崎県医師会と本院救命救急センターとの逆搬送体制をスタートし、地域の医療機関や保健・福祉施設等との情報交換、連携を図っています。

本院では、さらに県内の医療機関との間で綿密な医療連携ネットワークの構築が喫緊の課題と考えております。これまでの前方連携(支援)は事前の外来や検査予約や入院対応など、後方連携(支援)は退院調整や逆紹介などが主な業務でしたが、各医療機関の特徴を生かした前方連携・後方連携を進めていきたいと考えています。そこで、平成25年10月、本院入院患者さんの「前方連携・後方連携」を行っていただける医療機関を募り、連携を始めたいとの主旨で宮崎県医師会のご協力をいただき、アンケートをさせていただきました。その結果を踏まえて、連携に関する説明会開催等を行ない、県内医療機関との医療連携ネットワークの構築を行うことで、患者さんにとり最善の医療を提供できるようにしたいと考えております。

主な業務

1. 関連医療機関等との入院・退院・転院等の連絡・調整
 - 1) 入院支援・病床管理
 - 2) 退院支援・退院調整
2. 医療、介護、福祉等の相談・支援
3. がん診療連携拠点病院に関わる相談支援業務
4. 公費関係の業務
5. その他

現状では独居、高齢者世帯の増加など入院患者さんの背景の多様化に伴う一般的相談、がん相談、インフォームドコンセントの同席等が増加しております(表1参照)。内容としては医療費(公費)や入院費の相談、介護保険制度などの相談件数が増加しております。

表1 相談・面談業務件数(延べ件数)

項目	平成23年度	平成24年度
一般的相談	4321	5754
がん相談	1635	1824
苦情相談	9	16
インフォームドコンセント	6	25
セカンドオピニオン対応	25	18
総数	5996	7637

表2 退院支援

項目	平成23年度	平成24年度
退院支援患者数	392	805
退院支援延べ件数	457	844

住みなれた地域で医療・介護を受けることができるよう、入院時より退院支援に取り組んでいます(表2参照)。内容としては、入院時に退院支援スクリーニングを行い、定期的な退院支援カンファレンスを行っています。

患者さんが地域へ戻られても安全に安心して生活できることを目標に、今後も引き続き県内・県外の医療機関の医師、メディカルスタッフ、保健・福祉施設等と情報共有を行い、連携を図り、円滑なセンターの運営、活動に努めてまいります。



地域医療連携センタースタッフ



退院支援カンファレンスの様子

医学部附属病院長表彰を行いました

本院では、このたび医療又は病院経営の改善に関する秀でた貢献をした職員や、職員で構成されるチームを表彰し、職員の意欲の高揚並びにグッドプラクティスの共有を図ることを目的として、病院長表彰制度を創設しました。院内に広く推薦を募り、過去1年間に本院への顕著な功績を納めた複数の候補者の中から慎重に選考を行った結果、職員3名に表彰することが決定しました。

選ばれた3名の職員には、全病院職員が参加する懇親会の会場で表彰を行い、記念の盾を贈呈しました。

この表彰が、今後の本院職員のモチベーションの向上に貢献し、ひいてはさらなる本院の質向上になると期待しています。



医学部附属病院で「ギターの弾き語りコンサート」開催

平成25年11月17日(日)、医学部附属病院外来ホールにおいてアコースティックギターの第一人者として活躍されている吉川忠英氏をお招きして、ギターの弾き語りコンサートを開催しました。

このコンサートは、本院に入院し治療を受けた経験を持つ富田信二さんが「患者さんに少しの間だけでも病気の事を忘れて楽しんで貰えれば」との思いでプロデュースしていただいているもので、平成22年から他のイベントも含め4回目となりました。

公演は、楽しいトークを挟みながら、カントリー曲や皆さんが良く知っている曲をギターの弾き語りで披露していただきました。アンコールもあり、皆さん楽しいひと時を過ごしていただきました。



医学部医学生による「クリスマスコンサート」開催

平成25年12月14日(土)、医学部附属病院外来ホールにおいて宮崎大学医学部医学生によるクリスマスコンサートが行われ、今回の出演が初となるリコーダー同好会をはじめ、計6団体が楽器の演奏や歌を披露しました。

クリスマスコンサートということで、クラシックからポップスまで、クリスマスにちなんだ曲も多く演奏され、冬の訪れを感じていただけるコンサートができたかと思います。当日ご来場くださった方からも「来年が楽しみ」「これからも頑張ってください」との声をいただき、出演者一同次回の開催を楽しみにしております。



医学部医学生による「錦秋茶会」開催

平成25年11月24日(日)、医学部附属病院外来ホールにおいて宮崎大学医学部茶道部学生による「錦秋茶会」を開催しました。

「一椀の茶」を介して、患者さんをはじめとする多くの人々に奉仕し、交流の場を設けることを目的として、毎年茶会を開いています。お菓子には低カロリー甘味料を使用して、できるだけ多くの患者さんに召し上がっていただけるよう工夫しています。

当日は、多くの患者さんに来ていただき、楽しいひと時を過ごしていただきました。



本院の理念

診療、教育、研究を通して社会に貢献します。

基本方針

1. 患者さん中心の最適な医療の実践
2. 地域の要望にこたえる医療連携の推進
3. 先端医療の開発と提供
4. 人間性豊かな医療人の育成
5. お互いを尊重し、チームワークのとれた職場環境の整備

患者さんの権利

～本院は患者さんの権利を守ります～

- 誰でも良質な医療を公平に受けることができます。
- 診療の内容などについて、あらかじめ十分な情報と説明を受け、理解した後、同意あるいは拒否を選択する権利があります。また、セカンドオピニオンを求めることができます。
- 診療録に記録された自分の診療内容について、本院の規則に沿って、情報の提供を受けることができます。
- 診療内容その他についてあなたの情報は保護されます。
- 患者さんの尊厳は、医療行為のあらゆる場面において尊重されます。

患者さんへのお願い

- 医師をはじめとする医療者に対して、自分の健康に関する情報を正確に提供してください。
- 診療等に支障を与えないよう、病院内の規則や指示を守ってください。
- 本院の理念でもある診療、教育、研究を通して社会に貢献していくため、臨床教育や研究にご協力ください。

編集事務

宮崎大学医学部附属病院 地域医療連携センター

〒889-1692 宮崎市清武町木原5200 電話(0985)85-9165